

# 比喩としての戦争と夕風に 関する断片——過去・未来・現在

秋山 康文

1

今からほぼ二年前、この雑誌用の原稿（『可能性とうそぶきと——グスコープドリのなかにホレイシヨ』）を書き上げてから数日後、こんな夢を見た。

夜、星空、露天の広い駐車場。

数年前に廃車にした、僕のシルバーの（灰ともいうが）軽自動車  
車が止めてある。

と、星達がいつせいに、同じ方角に向かつて流れ落ちていく。  
僕は車に乗ってエンジンをかけると、ラジオから、ある国会議員が、某超大国の国防長官は友人なんですよ、と怒鳴り立てているのが聞こえてくる。

窓から、星の落ち行く先を見やると、地平線近くで戦闘機が煙を噴いている。

僕は車を、駐車場の出口へと向ける。出口のかたわらには、「ケンカ」や「実戦」でならす有名な空手家が二人（ひとりとは竹刀を持って）立っていて、こちらを見ている。

僕は車で、駐車場のゲートのバーをくぐって、もう始まつてしまったのだな、と思つた。

そのように思つて目が覚めて、「これではだめだ」と思つた。  
二年前の原稿を書いていたときに考えていたのは、自分の中の虚無的な物を、ナマのまま垂れ流して、それを再生産するようなことはしたくないということであつた。

しかし出来上がつてみれば（書きながらもまつたく予想していなかった訳ではないが）、なんのことはない、すべてを受け入れてくれる「Graceland」をどっち上げて、その実、人々を戦いへと巻き込んでいくという詐欺そのまま、いつてみれば、美しい笛の音でネズミや子供たちを誘つておいて、そのまま川へと突き落としたり連れ去つてしまつたりした、あのハーメルンの笛吹きそのままではないか。

2

今年（二〇〇五年）七月十六日に行われた第十六回原爆文学研究会における中野和典氏の発表『心象風景としての被爆都市』では、こうの史代『夕風の街 桜の国』とともに大田洋子の『夕風の街と人』が取り上げられた。

中野氏の問題設定の骨子のひとつは、被爆に関わる言説が、爆心からの距離によつて序列化されているような現状に対して、（それはそれとしての価値を認めつつ）そのような眼差し・配置を組みかえていけるような可能性を、「心象風景」（「内面化」された失われ行く風景（都市空間））の中に見出そうということであつたと思

う。そしてこのような問題設定は、以下のような危機意識に支えられていたのだと思う。爆心を中心とする地図(図式)の上では、私たちの言葉は弱体化し続けざるを得ない。なぜならば私たちは、絶えず爆心から遠ざかり続けているのだから。

このような、差異のある個別の言説・物語・風景のそれぞれに、いかにして力を与え得るのか、という中野氏の問題設定に共感を持ちつつ、しかし私は、もう少し違った問題設定からも、氏の発表を聞いていたのであった。

それは、〈神経症〉的な内面の風景の反復(もしくは、反復から離脱しようとするがための反復)が、いかに社会的な次元に開かれて、自分や周囲の世界を変えていけるのか否か、という問いである。

ここでいう〈神経症〉的な人間というのは、自分の存在を根底から揺るがしてしまうほどのなんらかの驚愕的な出来事の〈記憶〉となんらかの形で関わり続けざるを得ない(なかなか思い出せない、といったことも含めて)がゆえに、現在の生活の中でなんらかの苦しみ、不都合を抱えている人々、といったくらしいの意味である。こうした人々は、外から見れば現在進行形ではなくまた本人にとっても不分明な事柄に関わりとうとしている訳であるから、周囲の人間・状況とも齟齬を来しやすく、また、未来に対して明るい展望を描けないことによる不安も一因となって、現在を生き生きと生きることも為し難しい。

いまここで、そのような〈記憶〉に関わりとうすること自体がこうした〈病〉の原因なのだという言い方にも一理があることを認めておこうと思う。いわく、そうした人々の不安への対処の仕

方はますます不安を増大させるばかりなのだ。なぜそうした人々が不分明な過去に関わりとうするのかといえば、現在の不安に対する現実的な対処法を知らないばかりに、有り得るはずもなかった理想的な(万能な)統一状態をその過去の時点において捏造・幻視し、その捏造された理想的な過去の自分と現在の自分を同一視することによって、現在の不安に対処しようとしているからなのであるが、しかし、その捏造された理想的な自己は、現在における実際のな物事への対処法を知らないのだ、と。

このようにいってみれば、不分明な過去と関わりとうすることは自己慰撫的で排他的な単なる逃避なのだということになるし、現在の状況下で生活していくための具体的な方策を身につけるべき貴重な時間がどんどん減ってしまっているのは、まことに由々しき事態ではある。

しかし、このような苦しく由々しき事態に陥りながらも、不分明な過去と関わりざるを得ず、また、関わり続けているという事柄の内に、悟性(〈神〉)と(動物)との間にある人間としての経験に関する認識能力)に導かれた誠実さといったものを見ることも出来るように思うのである。これだけの陥穽と隣り合わせになりながらも、なおそれに執拗に取り組み続けているからには、やはり見出しがおかねばならない大切なものがあるのではないかと(たとえもしその結果見出せるのが、「理想的な自己ではあり得なかった」という悲しみのみであるのだとしても)。そして〈神経症〉的な人間と社会との関係を、それに則つたものとして描いてみたいと思うのである。

〈神〉のように全知ではなく、また、〈動物〉のように無時間

の中で自足し得るでもない人間を、そのような存在として存在させ得る為の条件を、(神経症)的人間の誠実な取り組みの中に、見出すことは出来ないだろうか、と思うのである。(廢墟)の中から人間を人間として肯定するために。

中野氏の発表では、大田洋子『夕風の街と人と』の中の「夕風の窒息感」に一つのスポットが当てられていたのだが、それが私には、ひときわ目を惹いた。それを、先のような私の問題設定に沿ってまとめ直させていただと、以下のようになる。

自分が住んでいた街を原子爆弾によって破壊され貧しく生きざるを得ない人々は、なおまた復興によるきらびやかな「ヒロシマ」(作中の表記に拠る)からも排除されるがゆえに、過去の自分たちの生活を思い出すためのきっかけ——「記憶のよすが・よるべ」(中野氏の言葉)さえ街の風景に見出すことすらも出来ない。だから、過去(被爆前の広島)と未来(ヒロシマ)とが生きた形ではつながることはなく、したがって、その結節点である現在が生きてきた形で始まることもない。そしてのみならず、その苦しさは伝わることもないのだ、と。

自身が「不安神経症」だと診断されたと語る、作中人物でもあり語り手でもある小説家、小田篤子は、この「夕風の窒息感」の中を歩き取材をつづけ、最後に、米国及び原子爆弾の投下者を相手にノミナルダメージで訴訟を起こそうとしている人物と出会って、そこに「完全な救いではないが、その片鱗」を見出す。

確かにそれ(アメリカ相手の訴訟)は問題を社会に開いていくのに大切なことではある。爆弾を落とされて泣き寝入りしているよりはるかによい。しかし、それだけでは取り残されてしまう問

題が、おそらくある。広島(廣島)と「ヒロシマ」との乖離の問題、つまり、ある個人のなかの過去と未来とのギャップ(及びその結果としての生き生きとした現在の不在)が、身近な他者(隣接する地域に住んでいる人々)とのある種のギャップによって作り出されてしまうという問題が、取り残されてしまうことになってしまふ。これでは風は風のまま、風が再び吹き始めることはないだろう。

### 3

年来、「いつしようにけんめい」ということに対するジレンマがある。「いつしようにけんめい」にやっているのだから、なんでも許される、という訳もないだろう。なに、ことにも結果の如何は問われてしかるべきものであろう。でなければ向上はない。だからたとえば、『いつしようにけんめい』にやったのだから、いいじゃないか」という言い方が、言い訳に聞こえてしまつて、なかなか、納得できないときがある。

しかしながら、しよせん人間は、「いつしようにけんめい」にやるしかないものだとも思う。とにかくその人その人の、出来る限りを尽くすしかないものだ、と。だから「いつしようにけんめい」はどこかで許されてしかるべきものなのだとも思う。

ことは、たとえば「がんばる」という言葉に対しても言えることのようにも思われるが、この二律背反めいたものが、日々の生活の中で、どうにも解消できない。

向上を願い、批判をしては相手の(もしくは自分の)意欲を削

ぎ落とし、だからといって、舌鋒を緩めることは、なあなあを嫌うがゆえに、出来ない。

理想と現実、という言葉があるが、そのどちらかに足場を固定してしまふのではなく、その両者を、その時々々の情況にに応じて、橋渡しし得る何ものかが、必要とされているということになるのである。

書店に、ニーチェの「アンチクリスト」の新訳が並んでいた。

僕は、自分を、ニーチェが批判の対象とした弱者の復讐、怨念感情たるルサンチマンの側にも、それから発狂した批判者・ニーチェの側にも、その両方に置いてみる必要があるように思われた。

すこし読んでみて感じたのは、弱者の復讐を批判するこの本の語り方自体が（ニーチェの思想内容全体に於いてというのではなく）、復讐の域を出てはいないのではないか、ということだった。ルサンチマンに対する批判は批判として納得できる。しかし、ルサンチマンに陥らざるを得なかった人間の必然性というものもある。そのことに對する理解と暖かい接し方というものがあつてしかるべきであろうと思われた（そしてそれが、読者である自分に欠けているということなのだろう）。

かつて被害者であつた者が、その悲しみ・怒りのために今度は自分が加害者になつてしまふような事態があるのだとすれば、それは自分自身をも否定・疎外することになつてしまふだろう。なぜならば自分が憎むものに自分自身になつてしまふのだから。そしてたとえバハナ・アーレントが全体主義を見出したのは、そのような自己疎外を組織化する地点においてであろう（そうしたことを考えている内に、三年前にこの雑誌で触れてみた井上光晴の『手

の家』のことを思い出したりもした）。

たとえどんなに正しい（と思われる）ことでも、戦いという方法を採用したとたんに、当初の期待を裏切り始める、ということがあるようにも思われる。もつとも、戦わなければ始まらないということもあるのかもしれないし、また、戦いを避けるための手段がルサンチマンの所産によるのでは、元の木阿弥ということになるのかも知れないのではあるが。

#### 4

「夕風」という言葉には、無風の状態にある種の絶望が、それから、一度止まった風がもう一度吹き始める（しかも逆向きに）というところに、ある種の希望が託されるものようである。

以下は、さだまさし『夕風』（初出、アルバム「帰去来」。後にアレンジを変えて新録音されアルバム「続・帰郷」に収録）の引用である。

今は こうしてひざを抱えて

寄せては返す波の思い出に 身を任せていよう

あの日同じ水ぎわで君は 消えてゆく足跡が悲しいと

だから側に居てと言つた

大きな貝ガラ白い耳にあてて 又来る夏を占う

君の影が揺らいで落ちて 風が止まる

僕に見えないものが 見えたね

だから急に黙つた 赤い夕日が 君の涙に 沈んだ

海猫たち もうお帰り 僕も砂を払おう

君の影が揺らいで消えて 夢が止まる

やがて ここにも風は戻って 陸わかから海へとまた

くり返す くり返す くり返す

海猫たち さあもうお帰り 僕も砂を払おう

僕の影が消える前に 消える前に

このような恋愛にまつわる歌と、周囲の世界がまったく想定し得ないようなモノへと変化してしまうような事態(こうした言い方もひとつの紋切り方に過ぎないのだが)とをアナロジカルに語ることには注意が必要ではある。

この歌において、この男(であろう)が「砂を払」って帰って来られるのは、帰って来られるだけの世界があるからである。だから、もし、こうした歌を取り上げて、例えば『夕風の街と人』のような言説に対して、「どうしてこの歌のように、断念することができないのか。そんな辛い過去の世界など捨ててしまえばいいではないか」などと言おうというのであれば、それは暴論にすぎないであろう。自分の存在にとって大きな比重を占めていた存在がいなくなったという事実はその簡単に認められるものではないのである。だから残された者も、こちら側から向こう側へと、その境界に佇むこともあるのだろう。

それでも、まだ生きようと思うことが幸運にも出来たのであれば(かわいい海猫たちよ)、勇気を持って「砂を払」って家へと帰るしかない。海は逃げないし、夕風は明日も明後日もやってくるのだから、行こうと思えば行けるのだから。そのような反復

の時間が必要とされているということなのだろう。

しかしここで問題となるのは、いささか贅沢な話のようにも思われるのだが、この浜辺のような場所を必要とするすべての人々にとって、そのそれぞれの人に必要な形での〈浜辺〉が、その人の住む街に、はたしてあるのかどうかということだ。

## 5

アメリカのフオーク・デュオ、サイモン & ガーファンクルは、一九七〇年のアルバム「明日に架ける橋 Bridge Over Troubled Water」を最後に解散したのだが、一九八一年に、「たった一度の」(と当時言われた)再結成のコンサートを行っている。ニューヨークのセントラルパークにて無料で行われたこのコンサートには、五〇万もの人が集まったそうである。

その様子が収められたCDがあるのだが、その中の一曲「ブックエンド Bookends」は、初めて収録された時のものと、一カ所だけ歌詞が変わっていたのである。

この作品は、一対のブックエンドのように冬の公園のベンチに腰掛けている老人の友人同士のことを歌ったもの。

Old friends, 年老いた友人同士

Winter companions, 冬の年老いた友人同士

The old men

Lost in their overcoats, オーバーコートに埋もれ

Waiting for the sunset, 日暮れを待っている

この部分の最後の「sunset」の「set」が聞こえないのだ。初め

は、コンサートは生演奏だから、歌い間違えたのがそのまま録音されたのかな、とも思ったのだが、しかし、二人同時に同じように間違えるというのも変なものだし、歌詞カードを見ると、やはり「Waiting for the sun 太陽を待っている」となっている(但し、歌詞カードの日本語訳は「日暮れを」のまま)。そして、遅まきながら、ハタと気がついたことがある。

老人達は、昼の世界にいて日暮れを待っている、のではなく、夜の世界にいて太陽を待っているのだ、という言い方の方が言い得ていることがあるのではないかと。つまり、思えば当たり前前でもあるのだが、苦しい状況にいる者の方が、それだけ、明るく暖かいものを求めているのではないかと。

老人と日暮れとが、ともに終焉に向かうものとして似つかわしいものであるとしても、しかし老人自身が期待しつつ、「待つ」のは、終焉そのものではないのではないかと。だから、老人と日暮れとを冬の詩情に塗り込めて満足してしまっていたのは、青年期にありがちな、ナルシスティックでセンチメンタルなペシミズムがなした部分もあつたのではないかと、などと思ったりもしたのである。(しかしそれは別な意味で、やはり老人は終焉を待っているものなのかもしれない。私にはまだ届かない、ある種の諦念によって。)

暗く寒い世界にいる者は光と暖かさを求め、光のただ中にいる者は、案外それに屈服しまた却って疲労していたりするものもあるのではなからうか。また仮に、人は光と暖かさを求め続けるものだとしても、光と暖かさそのものとなり得るものでもないようにも思う。街のデザインが、そのような光と闇との混在を許容するような(暖かさ)を持ち得ないということもないのではなから

うか、とも思われたりもするのである。また、そのような街の中で初めて人は、自分の位置を見出すことが出来るのかも知れない、とも思ったりもするのである。

(神)でもなく(動物)でもなく、また、理想そのものであるはずもなかがかといつて現状に満足してはられないという、不完全で贅沢な人間という存在にとつて、挫折の悲しさ・切なさというものはなかなか切り離し得るものではないだろう。もしそういつてよいのであれば、人間の住む場所には、悲しさ・切なさのための場所が必要とされているのだと言つてよいのだと思われる。

(記憶)の物語を紡ぎ出すきっかけになるならかの「よすが」があり、その物語の具体性の上で、その悲しみを共感できる人々がいて、そしてそれらすべてを暖かく清々しくまた時に荒々しく包み込む太陽、海、青空、星空、雨、雲、風、草木、山川、大地、虫、鳥、動物などの自然とがある、そうした場所が、街のどこかにあつてもいいように思うのである。そしてそのような場所は、(たとえば被爆という)物語の具体性に直接の関係がない人々とつても、その人それぞれの挫折の危急の時に、大切な休憩場所のひとつとなり得るのではなからうか。

## 6

中野氏の発表は、差異のある個々の物語を序列化して同等に扱わせようとはしない図式に対するひとつの異議申し立てであった。それならば私は、「爆心からの距離」という図式の代わりに

〈神経症〉の人間の悲しみという新たな図式を持つてきただけなのであって、結局、中野氏の問題設定に反して、個々の物語の差異を消去しようとする方法へと動いているのではないか、とも思う。

しかし、人間は万能ではないのだから、どのような条件がそろえば、なるべく多くの差異を受け入れることができるのか、という問いが立てられてしかるべきであろうとも思う。なるべく多くの差異を受け入れるための、より緩やかで、かつ、より切実なルール（倫理）、そのような、暫定的で最小限のしかし必要不可欠と思しきルールを求めその一段階として、今回は〈神経症〉の人間の悲しみといったものにこだわってみたつもりである。

しかしそれにしても、〈神経症〉の人間の中にこそ、人間にとって最重要の倫理を見出すことができる、だなんて、これこそ、最大級のナルシズムなのであり、だから〈神経症〉者はいつまでもナルシズムから抜けられず、したがっていつまでも〈神経症〉でありつづけるのだ、かように〈神経症〉とは排他的で自己保存的なのだ、という声も聞こえてはいる。

しかし、ここでもし〈神経症〉における葛藤というものが、外界との軌轢を内面化することにより生まれるのだと言い得るのであれば、先に書いたような場所が街に（日常の社会的生活空間の中に）出来、そしてそこで得られた悲しみをもとにした社会の側の変化への取り組みがあれば、それで〈神経症〉的な人間の生きづらさ及び〈症状〉は、かなり軽減されることになるのではないかと思われるのである。〈神経症〉とは、その苦しみの存するがゆえに、本来、自己揚棄的なものなのだろうと思うのである（たと

えその苦しさが、その人にとって、習慣性のある、ある種の快楽になつていくという事情があるのだとしても）。

夢幻能で僧と出会つて成仏して消えていく亡者のごとく、あるいは、青空に淡く溶けゆく真昼の打ち上げ花火のように、〈神経症〉とは、はかなく悲しく、可憐で可愛いものなのではないかと思つたりもするのである。

この文章自体が、そんなふうには、淡い輝きとともに舞い上がり、青い山と空の彼方に散り溶け去つてくれたら——そんな夢想は、私の心を、すこし軽く、涼やかなものにしてくれたりもするのである（こんな夢想も、やがて揚棄されるべき〈症状〉のひとつなのではあろう。しかし、今しばらくのあいだは……）。

ひかえめな 素朴な星は

真昼の空の 遙かな奥に

きらめいている

目立たぬように——

吉野弘作詩、高田三郎作曲、混声合唱組曲「心の四季」より  
『真昼の星』

If I have weaknesses, don't let them blind me now.

Summer skies and stars are falling all along the injured coast.

ポール・サイモン『コースト The Coast』

（アルバム「リズム・オブ・ザ・セインツ」

The Rhythm of The Saints）収録）

——人に関わるすべてのものから解き放たれて、

星は星として、夜に降る。人に関わるすべての土地に。